《修士論文要旨》

仏教図像にみえる鼻緒履物の形態と伝播

―天王図像の伝播を中心として―

竹下繭子*

はじめに
第一章　鼻緒履物の種類と形態
第二章　鼻緒履物の形式分類
第三章　石窟寺院にみえる天王像の履物
第四章　敬善寺洞の造営と天王図像
第五章　敬善寺洞天王像の類例と伝播状況
第六章　敬善寺洞天王像と西域画家との関係
結語

仏像の服制は地域性や時代様式が反映しているので、図像の源流や伝播状況を論じる上で大きな手がかりとなる。本稿では服制のうち「鼻緒履物」を取り上げ、中国を中心とした東アジアにおける仏教図像の伝播について考察する。

まず第一章では、古代中国の文献中にみえる鼻緒履物「鞋」、「屐」、「屩」について、『釈名』を中心とした文献史料によってそれらの形態を確認する。「鞋」は紐をしぼることで固定するわらぐつのような履物で、「屐」はおそらく下駄のようなものであり、「屩」は草鞋のようなもので、それぞれ実物例に比定できる。「屩」は文献中にしばしば「芒屩」とあり、南朝の歴史書や南方地方の記載に登場する履物である。『新唐書』車服志に「それ芒屩は水郷に出で、京華の用いるところにあらず」とあることから、芒屩は中原の履物ではなく南方の水郷地帯で用いられた履物であることがわかる。副葬品の屩をつける人物俑の出土例はすべて南方からのもので、中原における伝統美術の中では見られなかったが、仏教図像中に表された作例ではいくつか挙げられる。

そこで第二章では、仏教図像中にみえる鼻緒履物を緒穴の数や位置などに従ってA形式からE形式の五形式に分類し、形式ごとに特徴や形態を詳述した上で、具体的作例を挙げた。その結果、A形式はガンダーラ仏に見られる形式であり、現在の東南アジアやインドでも同形式の鼻緒履物が使われていることから、インドやガンダーラ地方で普及していた履物であることがわかる。B形式は「屩」であり、中国・朝鮮半島・日本など広い地域にみられる履物である。C形式とD形式

平成17年度　*文学研究科文化財史料学専攻

はB形式と同系統上の分枝的な関係である。また、E形式は文献中にいう「鞋」である。B形式やE形式の履物はガンダーラや西域など、中国以外の地域で見られないので、これらは中国独自の鼻緒履物であるといえる。そして、着甲の天王像が身につけている例が多いという特色がみえてくる。

第三章では鼻緒履物をつける天王像の特異性を証明するために、雲崗石窟から龍門石窟に至るまでの中国石窟寺院における天王像の履物について述べる。雲崗石窟・鞏県石窟寺・麦積山石窟・炳霊寺石窟・敦煌莫高窟に表される神将像はすべて被甲履物をつけており、鼻緒履物をつける神将像は一例も見出せなかった。龍門石窟には莫大な数の天王像が造像されているにも関わらず、鼻緒履物と明確にわかる像は敬善寺洞にみられる一対のみである。宮大中氏は『龍門石窟芸術』のなかで、「梁文雄龕」、「三世仏龕」、「賓陽北洞」の天王像は敬善寺洞像と同じ浮彫の像であり、鼻緒履物をつけるとしている。いずれにしても龍門石窟の天王像のうち鼻緒履物像が占める割合は一割にも満たないので、鼻緒履物をつける天王像は希少な造像であるといえる。敬善寺洞の天王像は特殊な図像であり、造像には図像など何らかの依拠するものがあったに違いない。

第四章では敬善寺洞の造営年代を考え、敬善寺洞天王像の制作年代を割り出したい。敬善寺洞は「敬善寺石像銘并序」の造像銘によると、紀国太妃韋氏によって造営されたことがわかるが、年銘がみられないため造営年代は不明である。賓陽北洞外の永徽元年（六五〇）の「王師徳等造像龕」では天王像は出現しておらず、蓮華洞外の龍朔二年（六六二）「偃師県□□郎楊□□造像盧舎那仏龕」には天王像が現れていることから、石窟における天王像の出現と流行は龍朔元年前後に求められる。また、玄奘の帰国に伴い、玄奘将来の優填王像の流行がみられ、龍門石窟においても永徽六年（六五五）以降に優填王造像の流行がみられる。敬善寺洞天王像も西域からの影響を色濃く受けているので、永徽末年以降の制作である可能性が強い。敬善寺洞の如来や菩薩像などの様式からみると、麟徳二年以前に造営された無年記洞龕よりも降るものではなく、敬善寺洞の造営年代は永徽年末から麟徳二年までの間に想定できる。

敬善寺洞天王像の特徴は西域的面貌であり、その服制は唐甲制に基づき、頭部は三面に円形飾りをつける天冠台をつけて束髪とし、足には芒屩らしき鼻緒履物をつけている。龍門の初唐窟龕には浮彫の天王像が目立ち、六十三号龕、賓陽北洞、二三九号龕、三世仏龕、梁分雄龕、三九九号龕などは敬善寺洞天王像と同じ服制をしていることから、敬善寺洞天王像のような図像が持ち込まれた後、龍門において浮彫による天王像の造像が盛行したと考えられる。

敬善寺洞天王像のひとつの特徴は、大刀を斜めにかかげて大刀の先端に片手を添える立ち姿である。第五章ではその類例を検証することで、この図像の流通と伝播状況を見ていく。周辺地域にはこのタイプの天王像と同一図像が存在しており、大雁塔石門などに線刻されており長安の造像に類例があることから、この図像は長安を起点として広

がっていったといえる。同じ図像は韓国・石窟庵にも伝わっており、石窟庵持国天像と敬善寺洞北壁天王像とを並べてみると、驚くほど相似している。また「戒壇院厨子扉絵」多聞天像も同じポーズをしており、図像の伝播は日本にまで及んだ。このポーズを採らないが同様の服制と鼻緒履物、西域的面貌を表す天王像は、同じ図像から派生したバリエーションと思われ、この天王図像は東アジアの広い地域に流布した。これらはすべて絵画的な線刻や浮彫で表されていることから、図像の抄本の伝播が想定される。七世紀後半から八世紀中頃の間に、長安を起点に洛陽、朝鮮半島、日本、また敦煌へ伝播したことが現存する作品から窺うことができる。

敬善寺洞天王像は唐甲制に南方の芒鞋を取り入れ、西域的面貌で造られたという特徴がある。第六章では長安の初唐造像において、西域からの影響を強く受ける契機を考えてみることで、この図像の成立について考察する。大雁塔の石門刻画にみえる西域的な天王像で思い出されるのが、『歴代名画記』の記載にある西域出身の画家・尉遅乙僧の慈恩寺における業績である。『歴代名画記』の筆者である張彦遠は尉遅乙僧の画について、「用筆は緊勁にして、鉄を屈し絲を盤するが如し」と述べている。この筆法はダンダンウィリク出土壁画片などの于闐国の遺品にみることができ、大雁塔門の石刻画も同じく尉遅派の画家による制作と思われる。長安造像界において西域の人物画や仏画といえば尉遅派の画家であり、大雁塔門の天王像と同じ特徴をもつ敬善寺洞天王像も尉遅画をもとに造られた可能性が強い。西域画家による天王図像の広がりは、永徽年間に玄奘将来の優填王像が流行したのと同時であると考えられる。この天王図像は長安で流行して、紀国太妃韋氏によって洛陽に持ち込まれた。韋氏が洛陽を東都と定めた顕慶二年（六五七）以後のことであると思われ、敬善寺洞の造営年代は顕慶二年頃に設定できる。

これらの天王像が履く「靿」は江南や湖南地方に普遍ていた履物であり、靿をつける造像もここからはじまったと思われる。靿をつける天王像でも最も早い時期の例は、龍門石窟・敬善寺洞の天王像である。これと同じ天王図像は朝鮮半島や日本にまで伝播して、靿をつける天王像はすべて絵画的な浮彫で造像された。

敬善寺洞天王像のもとになった図像は尉遅派の画家により描かれたと思われ、その筆法に于闐国の画法が反映されているが、鎧や履物などの服制は中国的である。鞋をはく神将像には北魏期の例があり、尉遅派の画家はこのような服制の天王像を自国の画法で表したのであろう。石材を用いて尉遅派の「用筆緊勁、如屈鉄盤絲」を再現するためには線的な浮彫でなくてはならず、この図像が主に線刻や絵画で表されるのもこのためである。